学校だより

第９号ジャカルタ日本人学校
令和４年(2022 年) １月６日

校　長　　緒　方　克　行
末子配付
ＴＥＬ：０２１－７４５－４１３０

未来を生きる力

明けましておめでとうございます

新しい年を迎え、30 名を超える子どもたちの編入がありました。児童生徒数が増えてくることは大変喜ばしいことです。今年も子どもたちと共にコロナ禍であっても充実した教育活動を推進していきたいと考えています。本年もよろしくお願いいたします。

さて、新年を迎えたことに当たり、子どもたちを待ち受けている未来の社会において、生きて行くために必要となる学力について考えたいと思います。

国際的に取り組まれている学力到達度調査(PISA)をご存じでしょうか。10 年ほど前、この PISA で日本は順位を下げ、ゆとり教育の是非が議論された時期がありました。「学力を高めるために、いわゆる読み書き計算などを充実させ、基礎基本をしっかり身につけなければならない。」「総合的な学習の時間　(※1)などに時間を割いている場合ではない。」などの論調が主流となり、総合的な学習の時間の存続が危ぶまれていました。しかし、その流れに待ったをかけたのが、当時の経済界でした。「問題にぶつかったときに、自ら考え判断し、そして実行できる人材こそが社会にとって必要であり、探究的な学習こそがその力を育むことができる。」という声が上がり、その存続は社会からの切実な要請であったのです。

先日、ある企業の方にどのような社員を求めるかとお尋ねすると「目標を示されたときに、到達するまでの道筋や手だてを考えることのできる人材」さらに「何が問題かを見抜ける人材」とおっしゃっていました。

大学の入試も思考力、主体性を評価するようになりました。当時の中教審が知識偏重の入試から、思考力・判断力・表現力や主体的に学習に取り組む姿勢を評価する入試への転換を図る大学入試改革案を答申しました。

そして、2 年前から実施されている学指導要領(※2)でもこのことが重要とされています。これは、知識の量だけの学力ではなく、習得した知識を生かしながら活用し、問題を解決していく力がこれからの社会を生きていくために必要であることの現れです。

ではこのことを、子どもたちにあてはめて考えてみましょう。

- 人数の異なるチームでリレーをするとき、勝敗を一人あたりの平均タイムで決める。
- オンライン授業で学んだ PC の扱い方や通信方法を活かして、世界の友達とつながる。

など、習得した知識を活用する力を育むことは身近なところで十分にできるのです。

昨年の JJS フェスティバルでは、自然や社会から見つけた問題を解決するために、調査し、整理分析し、伝える姿を見ていただいたところです。このように「未来を生きる力」については、総合的な学習の時間はもちろんのこと、日々の授業の中でも注視して育んでいきたいと考えています。

未来を予測することは難しいですが、社会の一員として生きていくために必要な力をいかに育てるかは、見えてきたような気がします。これからも、生きる力となる真の学力について、保護者の皆様と共に探求して行きたいと思います。

（※１）自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることなどをねらいとした時間。

（※２）どこの学校でも一定の水準が保てるよう、文部科学省が定めている教育課程（カリキュラム）の基準。およそ 10 年に１度、改訂しています。